

婦人科細胞診におけるクラミジア感染細胞の細胞形態と出現頻度について

◎城田 祐希¹⁾、川嶋 雅也¹⁾
兵庫県臨床検査研究所・HPL¹⁾

【はじめに】クラミジアは偏性細胞内寄生性細菌であり、子宮頸部細胞診において特徴的な細胞質内封入体が出現することが報告されている。今回、当検査室に依頼があったクラミジアの遺伝子検査結果と子宮頸部細胞診との比較検討を行ったので報告する。

【対象と方法】2025年1月～3月の間に当検査室においてクラミジア核酸検出(PCR法)の依頼があり、PCR陽性で、同時に子宮頸部細胞診を実施した43症例を対象とした。また、クラミジア核酸検出(PCR法)が陰性であり、同時に子宮頸部細胞診を実施している症例より無作為に抽出した38症例を陰性対象とした。

方法は、PCR陽性43症例、PCR陰性38症例の計81症例の子宮頸部細胞診標本を再検鏡し、クラミジア感染症に出現するとされる細胞質内封入体の形態学的特徴とその出現率を検証した。

【結果】PCR陽性43症例のうち、子宮頸部細胞診において細胞質内封入体 appeared のは7症例(16.3%)であった。出現した細胞質内封入体は形態学的に星雲状封入(NI),

顆粒状封入(ICI), 標的状所見(CTF)の3種類に分類され、7症例のうち星雲状封入は2症例(4.7%), 顆粒状封入は7症例(16.3%), 標的状所見は1症例(2.3%)に認められた。(重複あり)

また、PCR陰性38症例において、細胞質内封入体 appeared のは0症例(0%)であった。しかし、4症例(10.5%)においては細胞質内封入体と鑑別を要する空胞変性が認められた。

【考察】クラミジア核酸検出(PCR法)でクラミジア陽性であっても、細胞診で細胞質内封入体を認める頻度は16.3%であった。また、クラミジア核酸検出(PCR法)でクラミジア陰性であっても、細胞質内に空胞が認められ、細胞質内封入体と鑑別を要する結果となった。従って、細胞質内封入体はクラミジア感染を示唆する特徴の1つとして有効であるが、最終的には遺伝子検査で再確認することが必須であると考える。

連絡先 兵庫県臨床検査研究所 HPL 079-268-1101